

悪役令息に転生したら  
僕を断罪するはずの推しに  
寵愛されました

CHAR  
CTERS

アルヴィン・  
バーガンディ

魔竜族の侯爵令息で優秀な魔法医。  
傲慢な性格だが、なぜかセオリスに  
興味を持ち何かと世話を焼く。  
デイルモアとは親友同士。

デイルモア・  
グレン

シエンの夫で魔竜族。  
寡黙で一見すると無愛想だが  
シエンのことを溺愛している。  
侯爵家当主。

シエン・  
グレン

セオリスの兄。病弱なセオリスを  
いつも心配している。  
穏やかな性格だが芯は強く、  
頑固な一面も。

アンナ

グレン家に長く仕える  
侍女で魔竜族。  
デイルモアやアルヴィンが  
幼い頃から知る存在。

マイルズ

グレン家の下男で魔竜族。  
セオリスの部屋付きとなり、  
身の回りの世話を担当する。

セオリス・  
ラーベル

BL小説の悪役に転生してしまった少年。  
病弱で実父に疎まれて育った。  
最推しのアルヴィンからの  
断罪回避のために奔走中!

## 目 次

悪役令息に転生したら僕を断罪するはずの推しに  
寵愛されました

番外編 これからも楽しいひとときを

悪役令息に転生したら僕を断罪するはずの  
推しに寵愛されました

## 第一章 セオリス、五歳にしてお先真つ暗な未来を知る

「セオリス・ラーベル、ようやく見つけた。我が親友と番の大事な盟石を、よくも盗んでくれたな」「ひつ」

路地裏に隠れていたセオリスは、どうどう追い詰められたことを悟り、青ざめた顔で身を震わせた。数日の逃亡生活のせいで、くすんだ金髪はさらに薄汚れ、ほとんど灰色に近い。青い目は、冷たく笑うアルヴィン・バーガンディを凝視している。瘦せていてみすぼらしい有様は、着ている服が上等でなければ貴族の末弟には到底見えないだろう。

セオリスとは対照的に、アルヴィンはすらりとした体躯を持つ、魔竜族の美しい青年だ。装飾がほどこされた黒衣をまとう姿には優美な魔法使いらしさがある。彼の怒りに呼応して、赤い髪の先が炎に変化して揺れている。

セオリスはアルヴィンから目を離せない。彼のことが恐ろしいのに、美しくて無意識に見てしまうのだ。

「どうしてあなたがここに？　あの人は……ディルモア様は？」

セオリスの手には、金に輝く宝玉——盟石が握りしめられていた。

この盟石とは、魔竜が婚姻する時に、番に渡す契約の石だ。人族で言うならば、婚約指輪のようなものである。アルヴィンの言う親友とはディルモアのことで、番はセオリスの実兄であるシエン・ラーベルのことだつた。

「ははつ」

アルヴィンは馬鹿にするように笑つた。

「お前が何を望んでいるかくらい、俺にはとつぐに分かつていて。どうせ断罪されるならば、好きな男の手にかかりたいとも思ったのだろう？　だが、ディルモアがお前に手をかけたら、愛する実弟を殺されたシエンが苦悩する。それを間近で見るはめになるディルモアも、同じように苦しむだろう。そんなことを、この俺が許すと思うか？」

セオリスは震えた。今度は恐怖ではなく、怒りによるものだつた。

「何が愛する実弟だ！　お兄様は、僕を見捨てた偽善者だ！　ディルモア様だけが、あの屋敷で僕に優しくしてくれた。どうしてお兄様はあの人に愛されるんだ？　僕だって、同じ家の血が流れているのに！」

「黙れ」

アルヴィンは目を細める。

「ディルモアの番であるシエンを馬鹿にするのは、俺が許さない。ディルモアに代わって、俺が貴

## 様を断罪する

そして、アルヴィンは腰に下げていた長剣を抜いた。

「せめてもの慈悲だ。苦しまないよう死なせてやろう」

「ひつ。嫌だ。やめろっ。うわあああああ」

逃げようとしたが、アルヴィンはあつという間に距離をつめ、その首をはね飛ばした。

セオリスの体が汚い路地裏に倒れ、辺りを血で染める。

アルヴィンは剣についた血を拭いてから、鞘に納めた。

セオリスが死の間際でも手放さなかつた盟石が、緩んだ手からこぼれ落ちて地面に転がり、キラ

リと澄んだ光を放つ。アルヴィンはそれを拾い上げ、ハンカチで丁寧に包んだ。

「その汚いネズミを片付けておけ」

後ろに控えていた配下にそう命じると、アルヴィンは路地裏を後にする。

「これであの屋敷は平和になるな」

親友とその番の穏やかな生活を思い描いて、アルヴィンは嘘をつくことにした。セオリスは強盗に殺されていたと、シエンに話すとしよう。そうすればアルヴィンはシエンに嫌われずに済むし、事は丸く収まる。



「いやいや、丸く収まるわけがないだろ。サイコパスかよ……」

セオリスはうめくようにつぶやいて、目を覚ました。

「はあ、仕事に行かなきや」

残業続きで疲れているから、こんなに体が重いのだろうか。そろそろ限界だから、この会社は辞めるべきなのかも……と考えながら額に右手を当てようとし、視界に飛びこんできたその手が妙に小さくことに気づいた。

「え？」

「セオってば、いつたいどこに行くつもりなの？ 仕事つて？」

「ええ？」

セオリスは戸惑いのあまり、ぱちくりと瞬きを繰り返す。

青い天蓋てんがいがついたやわらかなベッドの傍には、十五歳くらいの美少年が座っていた。温和で優しそうな雰囲気をしていて、金髪を後ろで一つに結び、青い目には心配の色を浮かべている。少年は白魚しらうおのような手を、セオリスの額に当てるた。

「もしかして覚えていないのかい？」

少年は優しく問う。セオリスがその質問に返事もせずにぼんやりと少年を見ていると、彼は話を続ける。

「セオはお母様が亡くなつたショックで、高熱を出して寝こんでいたんだよ。ああ、まだ熱があるね。うわごとを言つて、どこかに行こうとするからびっくりしたよ」

「あ……ごめんなさい、お兄様」

セオリスはようやく、その少年が誰なのか思い出した。

ザザ男爵領を有するラーベル家の長男であり、セオリスより十歳年上の兄、シエン・ラーベルだ。シエンは白月のような纖細な美貌を持つだけではなく、性格も天使のように優しい。病気がちなセオリスのことも、かわいがつてくれている。

「お医者さんを呼ぼうか？」

「ううん、大丈夫。夢を見ていたんだ。夢の中では僕は大人で、夜遅くまで働いていて、本を読むのを楽しみに暮らしていたんだよ」

そう話しながら、セオリスは夢の内容を思い浮かべる。

シエンが心配するから言わないが、セオリスはあれがただの夢ではないと理解していた。  
どうやらセオリスにはほどど母の死がショックだつたらしい。高熱を出して寝込み、前世の記憶まで思い出したようだ。

赤ん坊の頃から体が弱く病気がちな上に、魔力漏出病を患つていて、ちょっととしたことで熱を出して寝こむのが現世の自分。そして、毎日働きづめで、好きな作家の本を読むことを唯一の楽しみにしていた青年が、前世の自分だ。

（今の僕は五歳だつけ。はは、まさか、大好きだつたボーアズラブ小説、それも二巻目の悪役に生まれ変わるなんて）

夢で見ていたのは、『鮮血侯爵の花嫁』せんけつこうしゃくのはなよめ というシリーズの二巻にあるシーンだ。前世の自分はこのシリーズが大好きで、三巻が出るのを待ちわびながら、何度も読み返していた。

前世のことは大して覚えていないが、胸がいっぱいになつて食欲が失せるくらい、その本のカップルに夢中で、体重が落ちていたことは思い出せる。仕事は残業続きで、上司に恵まれず精神を疲弊させていた自分にとって、その本は砂漠で見つけたオアシスのようだつた。

（前世の僕は、面白ければジャンルを問わずになんでも読むタイプだつたから、ゲイというわけではなかつたんだけど。あの作家が大好きだつたんだよね。特にあのカップルの恋愛模様が最高で……！）

あれほど好きだつたのに、作家の名前は思い出せない。

ただ、自分の死因は覚えている。ただでさえ疲弊していたのに、本にはまつたことで食事の量が減つたり、睡眠不足が続いたりして、免疫力が落ちてしまつた。そこへ急に病氣にかかり、運悪く悪化して亡くなつたのだ。

（部屋の本はどうなつたかな。家族が処分してくれているといいけど……）

セオリスは顔すら思い出せない家族が、自分の趣味を見ないふりをしてくれることを切実に祈つた。

「大丈夫かい、セオ。まだぼんやりしているみたいだ。ほら、林檎りんごを切ったからお食べ。昨日から何も食べていないから、少しはお腹に入れないと……」

考え事をしていたせいか、シエンが心配そうに目をうるませた。

「お母様が亡くなつたことは、私も悲しいよ。でも、君までいなくなつたら、もつと悲しい。がんばつて食べよう?」

「はい、お兄様……」

シエンがヘッドボードの前にクツシヨンを置いてくれた。セオリスがクツシヨンにもたれると、シエンは一口サイズで切られた林檎りんごをセオリスの口元に近づける。セオリスは小さな口を開けて、林檎りんごを食べた。塩氣しおがあつておいしい。

（優しいお兄様、大好きだ。なんで小説のセオリスは、こんなお兄様に嫉妬したんだろう）

『鮮血侯爵の花嫁』の主人公は、目の前にいるシエンだ。

小説の内容はこうだ。

父が亡くなり、叔父一家に屋敷を乗つ取られ、シエンとセオリスは身を寄せあうようにして生きていた。その後、父が魔竜族の侯爵であるデイルモア・グレンに多額の借金をしていたことが判明する。

シエンは真相を確かめるためにデイルモアに会いに行き、そこでデイルモアに見初みそめられるのだ。そして、借金を取り消しにする代わりに、嫁に来るようになると提案される。シエンは弟も保護していく

れるならと条件を出し、デイルモアはそれを受け入れる。

それからシエンはデイルモアと結婚し、すれ違いが起きたりトラブルに巻き込まれたりしながらも、最後には愛を分かちあうのである。

（くーつ、いいな。二人のすれ違いがまた王道でいいんだよなあ）

小説の設定通り、この世界には魔竜族と人族がいる。

魔竜族は魔法に強く長生きなので特權階級に多い。セオリスが暮らすザザ男爵領もまた、魔竜の王侯貴族が支配しているドラゴネア王国の中にある。というのも、元は人族が治める国だつたが、戦いに敗れてドラゴネア王国に統合されたからだ。

魔竜族は知識豊かで穩健な統治をするから、併合された土地は以前よりも平和になることが多いと、『鮮血侯爵の花嫁』に書いてあつた。

魔竜族の特徴は、特殊な繁殖方法にある。彼らは元々繁殖力が低いが、好きになつた相手と同じ種族に変身して、性別関係なく卵で子孫を残すことができる。そして、番番を決めると一途だつたつた。

そういうわけで、どんな相手が番となるか分からぬだけに、視野が広く博愛的な者が多いのだが、土地柄や家柄によつては人間を見下している者もいる。

（そ、そ、そ、種族が違うから、どうしても摩擦が起きるんだよね。小説では、種族差別への葛藤が描かれていたなあ）

だが、セオリスは実際には魔竜族を見たことがない。まだ五歳なので、そもそも屋敷から出たこ

ともない。この屋敷の使用人は人族しかいないのだ。それでも魔竜族と人族がいるということは、前世の記憶を思い出す以前から絵本の読み聞かせを通して知っている。

(僕の兄が主人公なら、侯爵とお兄様の恋を間近で見られるつてこと？ それはいいな)

記憶をたどりながら、すっかり他人事の気分でそう考えていたセオリスは、遅れて重要な問題に気づく。

(ちょっと待て。僕は一巻の悪役なんだよね？ このままだと、アルヴィンに殺されちゃうじゃないか！)

主人公達の恋路を見守れると浮かれてる場合ではない。

「僕……悪役……」

急に目の前がぐるぐると回り始め、気持ちが悪くなつた。

セオリスはベッドの上に、パタンと倒れる。

「セオ？ わあっ、また熱が上がつてる！ 誰か、お医者様を呼んでください！」

シンが慌てて、廊下にいる使用人に向けて叫ぶ声が響く。

五歳の子どもの小さな脳には、前世の記憶を思い出すのは負荷が大きすぎたようで、それからセオリスは一週間も熱で寝こむはめになつた。



それから五年が過ぎ、セオリスは十歳になつた。

日差しが強くなり始めた夏の午後、ラーベル家の玄関前で、セオリスは礼装で叔父一家や使用人達とともに体を強張らせて立つてゐる。魔竜族のジエット侯爵が訪れるとあり、下位貴族であるラーベル家は一家総出で出迎えをすることになつたのだ。

セオリスは正直なところ、複雑な気持ちを抱えている。これでようやく叔父一家が支配する屋敷から逃げ出せるという安堵と、これから待ち受ける悲惨な未来を思つての不安、その二つが入り交ざつてゐる。中でもよりも多くを占めているのは、無力感だつた。

(僕はがんばつて未来を変えようとしたけど……結局、何もできなかつた)

時間を無駄にしたことへの落ちこみから、その場に座りこんでしまいたいのを、ぐつと我慢する。せつからく小説のことを思い出したのに、ストーリー展開を変えるのは、幼いセオリスには不可能だつたのだ。

小説の中で、そもそもの不幸の始まりは、父が事故死したことだ。領地を視察している時に荷物の山が崩れて、父は頭を強く打つて死ぬ。

だから父をそこに行かせないようにしようと考えたが、セオリスにはどうしようもないことに、ラーベル家は典型的な貴族だつたのだ。

どうしたことかというと、貴族の家では、幼い子どもと親の普段の生活の場は離れているものだ。

前世での庶民の暮らしと違い、貴族の両親は直接的には子どもの世話をしないのが普通だ。子どもは離れて乳母の手によって育てられ、ある程度の礼儀作法を身につけると、ようやく親と食事ができるようになる。ラーベル家のような田舎の弱小貴族だろうと、伝統を重んじる貴族の家ならそれが当たり前だつた。

それでも、親と全く会わないわけではない。父が遠くに出かける時は見送りや出迎えをするし、父と一緒に軽いお茶会くらいならばすることはあつた。だが、父の——というより、領主の予定を変えさせるほどの影響力など、幼いセオリスにはなかつた。父から大して目をかけられていないので余計に。

なぜかというと、騎士の家系であるラーベル家は、強い者を尊ぶ傾向があるからだ。そんな家庭で、セオリスは生まれつき魔力漏出病という持病を抱えている。

この世界の人間や魔竜には、心臓につながる魔力器官という内臓がある。

魔力器官には魔力が満ちており、魔法を使うことで魔力が減る。減つた魔力は、体を休めればゆつくりと戻つていくものだ。

だが、セオリスは魔力器官に欠陥があつた。魔法を使つてもいらないのに、ヒビの入つたコップに水を入れたかのように、勝手に魔力が漏れ出してしまうのだ。

魔力が底を尽きると、代わりに生命力が消費されだす。生命力が減り続けると命に危険が及ぶため、魔力器官の底にはゲートがあり、魔力が尽きると自然にゲートが閉まり、本人は気絶するとい

う仕組みになつてゐるのだ。

魔力が減るたびに寝こんでいるセオリスは、父にどつては困つたお荷物でしかなかつた。

そんな父のもとで育つたにもかかわらず、兄のシエンは母からたつぶりの愛情を受けて、優しく善良に育つた。おかげでシエンは後継者教育で忙しい合間をぬつて、セオリスをかわいがつてくれた。ラーベル家の家風を思えば、ありがたいことである。

(お兄様のためにも、お父様の死を回避したかつたんだけどな)

何度思い出しても悔やまれる。

(せめて、叔父一家を屋敷に入れないようにしたかったのに……)  
シエンがいくら賢くとも、二十歳になつたばかりの若輩者だ。

彼は叔父からの領主補佐として助けるという申し出を、善良な気質ゆえに、感謝して受け入れた。そのまま後に、叔父の家が運悪く火災にあり、行く先に困つた叔父一家を屋敷に招き入れてしまつたのは、優しいシエンとしては当然の選択だつただろう。

結果として、叔父一家がラーベル家の屋敷を乗つ取るまで、半年もかからなかつた。

恐らく、叔父の家が火災にあつたところから、叔父の本家乗つ取り作戦は始まつていたに違ひない。(未来のことが分かつていても、誰も子どもの言うことなんて真に受けない)

両親を亡くした十歳の子どもに、何ができるというのだろうか。自分勝手な大人達に翻弄され、日々を耐えしのぐので精一杯だつた。

セオリスはこれまでの苦労を思い出して、ため息をつきそうになるのを我慢した。

ちょうどそこへ、豪奢な黒塗りの馬車が門から入ってきて、玄関前で止まつた。

御者が馬車の扉を開けると、まず現れたのは、黒い髪をした大柄な男だ。

（デイルモア・グレンだ……！）

セオリスには、すぐに誰か分かつた。小説通りならば今年で二百二十歳になる、魔童族の若者だ。見た目だけなら人族の二十代半ばくらいに見える。黒い髪は短く整えられ、灰色の鋭い目は、静かな冬の湖面みたいだ。黒衣をまとい、無骨でにこりともしないので、馬車から降りる様子は、まるで巣穴からのそりと出てくる熊のようだつた。

「シエン、掴まるといい」

「ありがとう」

デイルモアは馬車の中へ右手を差し出す。デイルモアのエスコートを受けて、おずおずとした様子で馬車を降りてきたのはシエンだつた。ラーベル家を出た時と違い、服装はセオリスが見ても分かるような高級品に替わつてゐる。けれど、シエンがセオリスを見る時の優しい眼差しはいつも通りだつた。

「セオ、私のかわいい弟、迎えに来たよ！」

シエンはすぐにセオリスを見つけて抱きしめた。

「お兄様、お帰りなさい！」

これからのこととはひとまず横に置いて、セオリスはシエンをぎゅっと抱きしめ返す。

実父にすら疎まれていたセオリスだ、叔父一家の扱いはさらにひどいものだつた。何かと寝こむセオリスを、叔父一家は鬱陶しそうに扱つていた。少し咳をするだけで、同情を誘いたいのかと眉をひそめられる。

前世の記憶があるせいで精神的に大人びてゐるセオリスでも、毎日居心地の悪い思いをさせられては疲弊する。限界を感じても逃げ場はないので、シエンの帰りを今か今かと待ちわびてゐた。

「もう大丈夫だよ、セオ。侯爵様に、弟も保護してもらえるようにお願いしたからね」「保護……ですか？」

よく分からぬという顔をして、セオリスはシエンを見上げて首を傾げる。

実際には、小説についての記憶があるから言われた意味を理解している。知らないふりをしながら、内心では安堵していた。今のところ、小説の筋書きそのままに進んでいたが、シエンがセオリスを本当に迎えに来るのか自信はなかつたのだ。

こうしてデイルモアという小説のヒーローを目にしたことで、あの小説の世界なのだと実感したし、セオリスもシエンに助けてもらえるのだと安心できた。

「セオ、よく聞いてね。私はつい先日、こちらにいらつしやる侯爵様と結婚したんだ」「ええ、結婚ですか？」

セオリスは目をまん丸にして、驚いた顔をする。演技ではない。小説で知つていても、急展開す

ぎて動搖させられる。貴族の結婚は気軽にできるものではないのだ。

セオリスの後ろでは、叔父一家や使用人達もざわついている。

「お兄様はお父様が残された借金について、お話し合いに行かれていたのでは……？」

「そうだよ。そこで彼に結婚したいと言われたんだ。侯爵がすぐにでも式を挙げたいと言うものだから、あちらで簡単に挙げてきたよ」

シエンは微笑みながら話す。結婚を対価に、借金を帳消しにしたというあたりには触れない。「私の弟であるセオも、ジェット侯爵領に連れていくよ。これからも一緒に暮らそうね、セオ」グレン家の所領は、ジェット侯爵領という名だ。デイルモアの両親はすでに亡くなっているため、現在は跡を継いだデイルモアがジェット侯爵と呼ばれている。

「ええと、でも、お兄様」

セオリスは首を傾げる。ちらりとデイルモアを見てから、シエンに問う。

「結婚は女性とするものではないんですか？」

「ああ、セオは知らないか。この辺りでは魔竜族を見かけないからね。魔竜族は性別や種族関係なく番と結婚できるし、卵で繁殖することができるんだよ」

「番……？」

「伴侶のことだよ」

セオリスはそうなのかと頷く。

(小説で読んだから知つてゐるけど……、実際に聞くと、ぶつとんだ種族だよね)

「そういえば、卵というのはどうやつてできるのだろうか。セオリスが上の空になつていると、シエンの表情が曇つた。

「もしかして怖いのかい？」

「いえ、違うんです。ちょっと驚いただけです。お兄様が一緒なら、どこに行こうと僕は怖くありません」

セオリスはそう言つて、再びシエンとハグを交わす。シエンも抱きしめ返し、涙のにじんだ声で言う。

「うん……！ 一緒に行こう、セオ。これからは私が絶対に守るから」

セオリスは笑みを浮かべる。

(どうかなあ。小説では、お兄様は弟を守れていなかつたようだけど)

喜ぶ一方で、そんなことを考えた。そうと知つていても、今のセオリスには、叔父一家とともにラーベル家の屋敷に残るほうが苦痛だ。シエンの差し出した救出の手にしがみつくしかない。

一週間ほど馬車に揺られて、セオリスはようやくジェット侯爵の主城であるアンバー城に到着した。

アンバーという名前なので宝石と同じように琥珀色の石壁を想像してしまうが、実際には灰色の

石材を使つた無骨な城だ。

旅の途中でシエンがセオリスに教えてくれたのだが、領地名のジエットは黒い宝石の一種だそうだ。一見石炭のような見た目だが、磨くと美しい光沢を持つため、漆黒の宝石とも呼ばれているという。軽いところや、こすると帶電するところが琥珀こはくと似ているため、昔は黒い琥珀こはく——ブラックアンバーと思われていたそうだ。そのため、ブラックアンバーから名をとつて、アンバー城と名づけられたらしい。

（グレン家は黒竜だから、その見た目にちなんでジエット侯爵の位を与えられたんだつけ）

君主制を敷いている魔竜族は、王が家臣に領地を貸与して、王家へと税を集め形をとつてている。王は魔竜族の貴族達に、宝石に由来する名前の爵位を与えていた。もし家臣が悪さをすればそれを理由に処罰をして、爵位と土地を返還させるわけである。

玄関の前には、侯爵の帰りを出迎えるために家臣や使用人が勢ぞろいしていた。

「大きなお城……」

そんな彼らの前で馬車を降りながら、セオリスは演技でもなんでもなく心の底から驚いた。アンバー城の城壁が囲むエリアだけでも、一つの町になりそうなほど広々としている。もちろん、城下町は別にある。そちらも、ラーベル家が有する大きな町が三つは入りそうなほど、とても栄えたところだ。

馬車に揺られてきた間に、グレン家とラーベル家の格の違いをまさまで見せつけられた。

セオリスのつぶやきが聞こえたようで、デイルモアが口を開いた。

「この城は、東西南北に城館がある。目の前に見える南館は、公人が出入りする場所だ。領主と家族は北館で過ごすが、セオリス・ラーベル、君は客だから西館の貴賓室きひんしつを手配してある」

奥まった場所は、領主一家のプライベートスペースということらしい。

デイルモアは口数が少ないタイプの男なので、旅の途中でも、シエンや側近以外とはさほど会話をしなかつた。貴重な機会なので、セオリスは丁寧にお札を言う。

「ありがとうございます、侯爵様。ところで、残りの東館には何があるんですか？」

「東館は使用人や騎士の住まいだ。君は近づかないほうがいいだろう。詳しいことは、西館を管理している第三執事のギリアードに聞くといい」

第三執事とは？ という疑問がセオリスの顔に出たのだろうか、シエンが教えてくれた。

「セオ、ここには城館ごとに執事がいるんだよ。南館、北館、西館、東館の順に序列があつて、家令が全ての城館で働く使用人を統括しているんだって」

「そんなに執事がいるんですか……！」

セオリスは目を丸くした。

ラーベル家では考えられないが、確かにこれほどの規模を執事一人で管理するのは難しいだろうから、責任者を分けるのは理にかなつていてる。

「わたくしがギリアードでございます。よろしくお願いします、公子様」

黒い髪と灰色の目をした長身の男が、セオリスにあいさつをする。三十代前半ほどに見えるが、魔龍族なので実年齢は不明だ。礼儀正しい態度のわりに、ギリアードの目つきが冷ややかなのが気になつた。

（うわあ、僕はあるの冷たい目からは、どこに行つても逃れられないのかな）

小説の流れを知つてゐるせいで、セオリスはすでに嫌な予感がしている。

「セオリスと呼んでください」

「畏りました、セオリス様」

先ほどのディルモアとの会話から、どうやらセオリスはここでシエンとは別れて、一人で西館に向かうようだ。

「あの、侯爵様。お兄様と会いたい時は、北館を訪ねてもよろしいのでしょうか？」

連絡手段がなくては困るので、シエンから引き離される前にと、セオリスは急いで質問する。

「西館の使用人に言づけるか、北館の執事に話せばいい。だが、君の兄は侯爵夫人なのだ。今後は前もつて面会予約をとるよう！」

ディルモアは身分を弁えろと釘を刺した。

セオリスの笑顔が引きつる。

（おいおい、どうして小説のセオリスはこんな男に惚れたんだよ。優しくないじやないか）

すると、シエンが眉をつり上げた。

「ディルモア、セオは私にとつて大事な家族です。面会予約など不要です。——セオ、いつでも訪ねておいで」

「いえ、お兄様。侯爵様のおつしやる通りですよ。僕は叔父一家から離れられただけで満足しています。それに、新婚家庭を邪魔するのはしのびなく思いますから」

ここでディルモアの心証を悪くしては、セオリスにとつて困る事態になる。

ディルモアのことを冷たいと思いながらも、セオリスは城の主人である彼を立てた。それに、わがままな弟がいては、シエンの評価も下がってしまうだろう。兄との関係性も良くしておきたい。「新婚家庭つて……」

シエンの頬が赤く染まる。その顔がすぐに申し訳ないというものに変わつた。

「ごめんね、セオ。私が至らないばかりに、十歳の子どもにそんな気遣いをさせて……」

シエンの今にも泣きそうな様子を見て、ディルモアはすぐに自分の言葉を訂正した。

「私が間違つていた。セオリス君、いつでも北館に訪問して構わない。シエンに会えるかどうかは別として」

「ディルモア、どうしてそんな意地悪を言うんです？」

「君が寝ていて起きられないこともあるだろう？」

「ディルモア！」

礼儀正しいシエンが、珍しく声を張り上げた。耳まで赤くなつて、恥ずかしがつてゐる。セオリスは

スは何も知らない子どものふりをすることにした。

さすがはボーアズラブ小説の世界だ、ヒーローの手が早い。結婚してすぐに寝所をともにしているらしい。どうりで、お堅いシエンがデイルモアを名前で呼ぶほど親しげにしているわけだ。

「お兄様、どこかお悪いのですか？」

「いや、その……勉強をして夜更かしすることがあってね。子どもは気にしなくていいんだよ」

シエンは笑顔をとりつくるつて話を誤魔化し、セオリスの頭を撫<sup>な</sup>でる。セオリスはそれで納得した顔を作つた。

「ラーベル家でも、多忙でしたものね。どうかお体にはお気をつけて。僕は西館に行きますので、こちらで失礼いたします」

「心配しないで、セオ。私も時間を見つけて、様子を見に行くから」

「はい」

シエンがセオリスを軽くハグすると、デイルモアが眉を寄せ、シエンを腕に抱き上げた。シエンが驚きの声を上げる。

「えつ」

「シエン、君は弟に構いすぎだ。さあ、帰るぞ」

「ちょ、ちょっと、だからって抱き上げなくともいいでしょ？ 降ろしてください！」

「駄目だ」

「セオ、ごめんね。またね！」

デイルモアはシエンを抱えたまま、南館へ入つていく。セオリスは兄に向けて、軽く手を振つた。  
(もしかして、あの小説でシエンが弟の様子を見にこられなかつたのつて、物理的に動けなかつただけなんじや)

溺愛はボーアズラブ小説では王道の展開だが、兄の嫁ぎ先にお邪魔する未成年者という境遇のセオリスとしては、保護者がこれでは先行き不安だ。

西館は、南館の廊下を通り抜けた先にあつた。

白い漆喰<sup>しっくい</sup>が輝く、青い屋根が優美な建物だ。

ギリアードが館の説明をしながら歩くのを、セオリスは追いかける。子ども相手だというのに、ギリアードはセオリスと歩調を合わせる気がないようで、セオリスはほとんど走つているような状況だ。客を案内する執事としては、すでに失格である。

「西館はお客様のための館です。一階に舞踏会が開かれるホール、晩餐会<sup>ばんさんかい</sup>やお茶会のための食堂、遊戯室、二階に宿泊用の部屋がございます」

「そうなんですね」

一階は交流の場と見たほうがいいらしい。  
ギリアードは二階に上がり、隅の部屋の前で立ち止まる。

「シエン様から静かな部屋をというお申しつけを受けましたので、こちらの部屋にいたしました」  
「はい」

セオリスが通されたのは、櫻材の家具が使われた素朴な部屋だった。カーテンやラグ、椅子の布張りは緑色で統一されている。緑の天蓋が下がっている寝台に近づき触れてみると、リネンは肌触りが悪い。

「いかがでしようか?」

ギリアードの口調は丁寧だが、その目つきや態度はあからさまに感じが悪い。すでに取り繕うのをやめたようで、セオリスを見下していることを全く隠す気がないらしい。

「気に入りました、ありがとうございます」

セオリスはにこりと笑つて礼を言う。

(正直、ラーベル家の僕の部屋のほうが立派だけど、初日からお兄様を呼んで騒ぐほどでもないよね)侯爵家の客室がこの程度なのかという残念さはあつたが、今のセオリスにとつて、不愉快な叔父一家がいなだけ、どこでも天国に思える。

「それから、この部屋付きの下女や下男を三名選びましたので、お使いください」

ギリアードの言葉とともに、下女が一人と下男が一人入ってきた。

彼らはそれぞれ下女のエナ、下男のルドルフとネイドと名乗つた。三人とも黒髪に灰色の目をしていて、使用人の制服に身を包んでいる。下女は黒いワンピースと白いエプロンというメイド服、

下男は紺色の長袖シャツに、灰色のズボンというシンプルないでたちだ。黒い長靴はぴかぴかに磨かれている。

「これからよろしく」

セオリスが声をかけると、彼らはお辞儀を返す。

「では、私はこれで失礼します。何かあれば、使用人に言づけてください」

ギリアードはそう言うと、お辞儀もせずに部屋を出て行つた。

使用人の態度もギリアード並みに冷たく、セオリスはすでに壁を感じている。だがその中で一人だけ、ルドルフという青年だけは親切そうに問い合わせた。

「セオリス様、お荷物を片付けますね。触つてほしくないものはござりますか?」

「いいえ」

「では、こちらで整理させていただきます」

セオリスが頷いたのを見て、彼らは仕事を始める。

(使用人の制服は、どこの屋敷でも似たようなものなんだな)

下男達がセオリスの荷物を運び入れ、下女が衣類をクローゼットへと収納するのを眺めながら、セオリスはそんなことを考えた。

実家から持つてきた荷物はそれほど多くないので、彼らの仕事はすぐに終わつた。

「僕は疲れたから、休むよ」

「では、後ほど、軽食をお持ちいたします」

使用人達はお辞儀をして、部屋を出て行つた。

セオリスは上着を脱いでクローゼットに仕舞うと、ベッドに寝転がる。

「はあ。これからどうなるのかな……」

不安でいっぱいだつたが、疲れていたのでそのまま眠つてしまつた。

翌日から、セオリスは周りをよく観察して過ごすようになった。

グレン家で働く魔竜族の使用人は、黒髪や灰色の目をした者ばかりだ。

（デイルモア・グレンは、黒竜一族の長だつて見るべきなのかな？）

デイルモアは黒竜なので、その配下である使用人達も同じ黒竜だと思つたほうがいいのかもしれない。

人間であるセオリスは魔竜の違いについて詳しく知らないが、人間でも土地や人種によつて外見が変わるので、魔竜の場合も似たようなものなのかも……と考えた。

前世ではこの小説の大ファンだつたのだが、あくまで主人公達のキャラクターが好きだつたため、周辺の細かい設定までは覚えていない。使用者のようなモブキャラならなおさらだ。

（魔竜族のことも、そこまで詳しく書いてなかつたもんなあ）

セオリスはこの世界で育つてもう十年になるのに、ラーベル家の領地にいたのは人族ばかりだつたから、これまで魔竜族の影すらも見たことがなかつた。

（そもそも、僕が元気だつたとしても、外出できたかは分からぬいけど。貴族の子どもつて、大事に守られてるんだよね）

叔父一家のことで暮らすのはかなり窮屈きゆうくつだつた。

それはセオリスにとつては嫌なことだつたが、生活レベルだけを見れば、平民よりは恵まれていた。あれほど邪険にするわりに面倒は見てくれるので不思議に思つていたが、シエンの話では、貴族は体面を気にするため、血縁者ならば、最低限の生活の世話をするのが常識らしい。道徳的観念と言えばいいのだろうか。もしセオリスを虐げようものなら、貴族としての度量が足りないと周りから判断されるそうだ。

そんな社会通念には従いつつも、叔父一家の気持ちは別ものらしい。セオリスが部屋から出て彼らの視界に入るだけで、めざわ目障りそうに眉をひそめられたものだ。その目線を避けようとしたセオリスの行動範囲は、自然とかなり狭くなつた。

（あんな調子だつたから、外部の情報なんて当然得られないしなあ。家庭教師は七歳から付いていたけど、基礎を教えたらすぐに帰つてしまふような人だつたし）

そんな恵まれない状況でも、セオリスが貴族として最低限の教養を身につけているのは、兄であるシエンの手助けがあつたからだ。

部屋から出られないセオリスの退屈しのぎは本しかなかつたので、体調が良い日は本を読んで過

ごしていた。さらにシエンがお見舞いに顔を出すたびに、分からぬところを質問していたのが良かったのだと思う。兄は弟に頼られるのが嬉しいようで、喜んで教えてくれた。

（ここでも勉強をさせてもらえるのかな。本を読みたいな）

掃き掃除をしている下女のエナに、セオリスは話しかける。

「ねえ」

本を借りてきてほしいと頼もうとしたところ、埃っぽい空気を吸つてしまい、セオリスは咳きこんだ。

「ゴホゴホッ」

「はあ、なんですか。わざとらしく咳をして」

エナはじろりとこちらをにらんだ。

セオリスはエナの無礼な態度に、純粹に驚いた。

ラーベル家では親族に嫌な態度はとられたが、使用人は主家人間として扱つてくれていたからだ。なぜならラーベル家の後継者は兄であるシエンだつたし、使用人達は直系の血筋に仕えることを誇りに思つてゐるようだつた。むしろ叔父一家へ向ける目のほうが冷たかつたくらいだ。

「ああ、ごめん。ちょっと空気が乾燥してゐたみたい。ねえ、本を読みたいから借りてきてくれないかな」

「私には権限がありませんので、執事に確認いたします」

「ゴミをちりとりに集めると、エナは退室の礼もせずに部屋を出て行つた。

すぐに取り次ぎをしてくるならそれでいいかと、セオリスは寝台に腰かける。ジエット侯爵領はラーベル家よりも北部にあるせいか、夕方になると、夏だというのに空気がひんやりしている。病弱なセオリスには肌寒く感じられるため、使用人を呼んでカーディガンを用意してもらおうかと思ったが、部屋付きが三人もいるのに今は誰もいない。わざわざ呼びつけるのも面倒で、セオリスは自分でチエストからカーディガンを探して羽織つた。

「コホン。ちょっと空気を入れ替えよう」

カーディガンで体が温まつたので、セオリスは窓に近寄り、そつとガラス窓を押し開ける。清涼な空気が入りこみ、セオリスは息をついた。

「ここって本当に客室なのかな。景色がちつとも良くないな」

この部屋が二階にあるせいだろうか。アンバー城を守る城壁に遮られて、壁しか見えない。階下には花壇があるようだが、庭に植えられている針葉樹の枝が邪魔をして、全貌が分からぬ。

それでも、静かだという点は気に入つた。

セオリスが窓辺にぼんやりとたたずんでいると、ノックの音が聞こえた。

「はい、どうぞ」

「私だよ、セオ。入つてもいいかな」

「お兄様？ もちろんです、お入りください！」

セオリスは窓を閉め、扉を開けに行く。シエンはげんそうに眉をひそめた。

「どうしてセオが開けに来るの？ ここには使用人を三人付けたと、デイルモアから聞いているけれど」

「皆、忙しいみたいですね」

セオリスにも彼らの行方は分からぬので、そう答えるしかなかつた。

しかし、シエンには許せないようで、むつとした顔をしている。

「職務怠慢だ。セオは体が弱いから気をつけてほしいと言つてあつたのに。後で叱つておこうか？」

「ふふ。お兄様、お気持ちは嬉しいですが、必要ありませんよ。これほど広いお城なのですから、移動にも時間はかかるでしょう？ とりあえず、中にお入りください」

セオリスはそう言つてから、しまつたと思った。この部屋には、応接用のテーブルセットが置かれていなかつた。中に入ったシエンは部屋を見回し、ますます眉間にしわを刻む。

「日当たりは悪いし、狭い部屋だね。ラーベル家にあつたセオの部屋のほうが広いのではないか？」

「静かなのは気に入っていますよ」

「セオ、確かに私は執事に、静かな部屋を用意するようと言つたよ。でも、これでは客室ではなく、使用人部屋だ。執事に話して、部屋を変更させるよ」

「えつ、でも……」

セオリスは困つた。

「居候二日にして、事を荒立てたくなかつたのだ。

「いいかい、セオ。魔竜族の中には、人間を弱い者だと下に見ている者もいるんだ。私はグレンの番となつたから同胞として迎えられているけど、ときどき剣呑な態度をとられることもあるよ。それは別に構わないんだ。私が努力するべきことだから」

シエンの真面目な言葉に、セオリスは胸をときめかせた。

（ああ、その誠実なところ！ さすがは主人公だ！）

セオリスは兄を尊敬する一方で、小説の推しを見られたことに満足している。

「だが、デイルモアは私と約束したんだよ。私が番となつて嫁ぐ条件として、弟を保護すると。貴族にとつて約束を守ることは、最重要事項だ。それは人間だろうと、魔竜族だろうと変わらない」

「はい」

「君は居候だからと思つて、遠慮してゐるだろう？ そんな気遣いはいらないよ。デイルモアが約束を守らずにセオに窮屈な思いをさせるなら、私は彼と離婚してラーベル家に戻るから」

「ええつ」

セオリスはぎよつとした。

そして、夢で見た小説のシーンを思い出した。

時間をかければ、父が作った借金を返すことはできるだろう。だが、シエンがそれを選ばず、やむをえずデイルモアと婚姻したのは、そうしなければデイルモアが土地や屋敷、爵位を売つてでも

返してもらうと脅迫したせいだ。

小説ではそれがシエンにとつてネットになつており、後でそれ違ひが起きる原因になる。

シエンが強気な態度をとつてゐるのも、その辺りが腹に据えかねてゐるせいだろう。もつとも彼自身は家門や領地や爵位には執着していないので、手放すのは構わない。それでもそうしなかつたのは、病弱な弟に無理をさせないためだ。

「お兄様……結婚してお幸せにされてゐると思っていたのに、違うのでしょうか？」

セオリスが悲しい顔をしたせいか、シエンは慌て始める。

「いやつ、違う。幸せだよ、もちろん」

「それならいいのですが……。そんなに簡単に離婚だなんて言わないでください。あつ、もしかして、侯爵に嫌な目にでも遭わされているのですか？ そういうことなら、僕には離婚を止められませんね……。僕は保護されるよりも、お兄様の幸せのほうがずっと大切ですから」

「セオ……！」

シエンは感動して目に涙を浮かべ、セオリスを優しくハグする。

「心配させてごめんね。デイルモアは私を大事に扱つてくれているから、気にしないで」

「……はい」

セオリスは安堵の息を吐く。

もし自分のせいで離婚になつたら、胃が痛くなりそうだ。急に緊張したせいか、なんだか気持ち

が悪い。

「セオつたら、どうしてこんなに体が冷えているの？ それに体調も悪そうだ。ひとまずベッドで休みなさい」

「はい」

シエンはセオリスを誘導して、ベッドに寝かせる。

だが、ごわついたシーツの感触に気づいたようで、シエンの眉が吊り上がつた。

「こんなに質の悪い寝具を使うなんて！」

シエンが怒つて悪態をつく。

「う……。お兄様……大丈夫ですから……」

「セオ？ どうしたの？」

「なんだか、くらくらします」

「ああ、持病の発作だね。ゆつくりお休み。起きたら、部屋のことは改善してあるからね」

——お願いだから、使用人達を怒らないで……

セオリスはそう言いたかつたが、こんな時に魔力漏出病の発作が出たせいで意識が遠のき、シエンを止める暇もなく氣絶した。

セオリスが目を覚ますと、部屋は豪華なものに変わっていた。

肌に触れるシーツはなめらかで、家具も高級品が置かれていることが一目で分かる。白と青を基調とした洗練された部屋は輝いて見えた。

「セオ、目が覚めた？ 気分は悪くない？」

ここは天国かな？ とぼんやりしていたセオリスは、シエンの優しい声に誘われて右を見る。そして、ビクッと震えた。シエンの後ろで、デイルモアが腕を組んで威圧的に立っていたのだ。機嫌が悪いのが丸分かりだ。

「おにい……ケホケホ」

いつたいどれくらい寝ていたのだろうか。口の中はカラカラに渴いている。

「セオ、今回は三日も寝ていたんだよ。馬車での移動が負担になつたのかもしれない。もつと気をつけてあげれば良かつたね。——さあ、水を飲んで」

シエンは後悔まじりにつぶやくと、セオリスをそつと起こして、水が入つたグラスを口元に当たた。水がすっと体内にしみいつておいしい。まるで甘露みたいだ。

「セオリス、君の兄はこの三日間、ずっと君につきつきりだつた」

デイルモアがぼそりと言つた。

（それで、あなたは不機嫌なんですね）

魔竜族全般が番へ対して強い執着心を持つてゐるのかは分からぬが、小説にはデイルモアが些細なことで嫉妬する様が描かれていたので、その辺りの事情は知つてゐる。

「すまなかつたな」

「へ？」

シエンを独占していたことへの文句でも言われるのかと思つたが、違つた。デイルモアが口にしたのは謝罪の言葉だつた。予想外だつたので、セオリスは間の抜けた返事しかできない。

「魔力漏出病というのは、魔竜族では聞かない病氣だ。ゆえに、私が君の体の弱さを、軽視していたことは否めない。それに加え、君には最高の待遇をと執事に命じていたにもかかわらず、中級使用人部屋をあてがつていたことが判明した。すぐに気づけず幼い君に苦労をさせてしまつたことは、申し訳なく思つてゐる」

デイルモアが言うには、今回のことは使用人が勝手にしたことらしい。

（へえ、あれって中級使用人部屋なのか）

中級であるレベルの部屋をもらえるなら、グレン家の待遇は使用人にとっては良いほうだ。

セオリスがひそかに感心していると、デイルモアが部屋の入り口に控えていた側近に話しかける。

「おい、連れてこい」

「はっ」

数分もせぬうちに、執事のギリアードと、エナヒルドルフ、ネイドが騎士に連れてこられ、床に乱暴に正座させられた。

セオリスはその様子をあ然として見る。この世界に正座の文化があつたとは知らなかつた。

「この者らは、魔竜族にとつて番は魂の伴侣だということを知つてゐるくせに、私の番を悲しませた。ひとまず罰として、君の目が覚めるまで水しか飲ませず食事抜きとしたが……」  
寝起きでよく回らない頭でも、デイルモアが厳しい处罚を与えたことが分かり、セオリスの顔が強張る。

「デイルモア、セオが怖がるでしよう？」

「罰を与えたという話は、彼も知つておくべきだ」

シエンの抗議に対し、デイルモアは淡々と返す。その点を譲る気はないようだ。

「セオリス、君が望むならば、この者達に鞭打ちの罰を与えた上で、紹介状も与えず城から追放することもできる。どうする？」

セオリスはぶんぶんと首を横に振る。

「いいえ、必要ありません！ 罰はもう十分に受けたと思います。それに……彼らが反発する気持ちも分かります。普通、番はともかく、弟が居候をしては迷惑でしよう」

これに対して、シエンが制する。

「セオ、デイルモアは結婚する時にこの条件を呑んだのだから、デイルモアに仕える者達が不満を示すのはお門違いというものだ。そもそも、私はセオのことがなかつたら、デイルモアと結婚するつもりはなかつたからね」

シエンが爆弾発言をしたので、場が凍りついた。

「シ、シエン……？」

デイルモアの口端が引きつる。

「私としては、爵位や土地屋敷を全て売つて、父が作った借金を返済しても構わなかつたという意味ですよ。それは今でも変わりません。私の大事な家族を粗末に扱われるくらいなら、離婚するほうがましですので」

「それは困る！」

デイルモアは焦るあまり、切羽詰まつた言葉を放つた。そして、こんな事態を引き起こした使用人達を恐ろしい目でにらむ。

「お前達、誠心誠意謝るのだ！」

「シエン様、セオリス様、申し訳ございませんでした」

ギリアードらは声をそろえ、平身低頭で謝罪する。デイルモアの魔力が怒りにつられて暴れていののか、室内だというのに風がごうごうと吹き荒れ、彼らは怯えて震え始める。

セオリスはそんな有様を呆然と眺めた。

（お兄様、すでに夫を尻に敷いているのですね……）

あのたおやかで優しい兄が、こんな面を持ち合わせているとは思わなかつた。兄が怒つた顔すら

見たことがなかつたので、自分は弟としてかなりかわいがられていたようだ。  
そして同時に、ここでセオリスが止めなければ、シエンとデイルモアの恋愛模様を近くで拝めな

くなるのではないかと気づく。このカッブルのファンとしては、それだけは阻止しなければならない。セオリスは思い切ってディルモアに声をかける。

「お義兄様、僕は謝罪を受け取りました。これから彼らが改善してくれるなら、僕はそれで構いませんから」

「義弟の優しさに感謝するのだな。しかし、私の命令を無視した罰は受けでもらわねばならん。四人とも、一年間の減俸だ。下がれ」

ディルモアが冷え冷えとした声で言うと、四人は怯えながら退室する。去り際、彼らが顔を上げたのを見て、セオリスの背筋に悪寒が走った。

（ああ、小説で使用人からセオリスが嫌われていたのは、そういうことか。最悪だ……！）

彼らの目に宿っていたのは、憎悪と恨みだった。

初日の時点で、彼らがセオリスのことを良く思っていないのは明白だった。シエンの『言葉を借りれば、今の彼らは「下に見ている人間のせいで、当主から叱責しつせきを受ける屈辱を味わわせられた』状況だ。

どうして小説でセオリスが使用人からいじめられるのか、セオリスはずつと不思議に思っていた。奥方の親戚に使用人が無礼な真似をするなんて、階級社会ではありえないことだからだ。

居候二日目にシエンが部屋に来て、セオリスの環境に早くも気づいて改善しようとしてくれたことを考へると、あの小説で描写されていたように、主人公が弟の状況に気づかなかつたというのには、

「じつまが合わない。こんなふうに、あつさり解決したからだ。

だが、実際はシエンの対応が原因で、セオリスいじめの土台ができあがつたのだ。

（お兄様がグレン家の人に恨まれないようにするためにも、これ以上、確執ができるないように気をつけなきや！）

セオリスは密かに決意する。

「セオリス、グレン家に仕える医者を寄越そう。それから、他に希望はあるか。今回の件の詫びとして、できる範囲でなんでも叶えよう」

ディルモアは、シエンとの安泰な生活にはセオリスの存在が不可欠だと悟ったようで、急にセオリスに気遣い始めた。

「えつと……では、お言葉に甘えて。僕はここでも勉強がしたいです。本を貸していただけませんか」セオリスの要望を聞いたディルモアは、意外そうに片眉を跳ね上げた。

「そんなことで構わないのか？ 装飾品や衣類を買つてもいいのだぞ」

「この通り、病弱の身には不要な物ですから……。部屋から出られないことも多いので、退屈しが欲しいのです」

「君はそこまでか弱いのか……。なるほど、シエンが弟の保護を結婚の条件にあげるわけだな」

大きな問題を前にした時のように、ディルモアは顔をしかめる。少し考えた後、頷いた。

「では、教師の手配をしておく。毎日ではなく週に二度、二時間程度にしておこう。無理をさせて

は良くないからな。合間に休憩をとるよう言つておく」

「ディルモアがちらと背後にある側近の男を見ると、彼は頷いた。手配するのは彼らしい。

「それから、本だな。北館の図書室を使つてもいいが、西館にも客用の書斎がある。どちらも利用を許可しよう。後で鍵を持つてこさせるから、好きな時に出入りしなさい。ただし、貸出は司書が許可するものだけだ。貴重な本もあるのでな」

「はい」

「そもそも話、君の分の予算も用意しているから、それで好きな本を買つても構わない。本の購入が必要なら、西館の司書に伝えれば手配してくれるだろう」

セオリスは首を傾げる。

「僕の分の予算ですか？」

「侯爵家が世話をしている親戚だ。当然、生活費くらい用意している。君はまだ子どもだから、百万ゴーランドくらいあればいいな？」

「ひや、百万ゴーランドも!?」

セオリスが驚いたのは、ラーベル家の一月分の領地収入と同じくらいだつたからだ。世情に疎いセオリスでも、算術の勉強をした時におおよその年収くらいは教わっている。庶民ならば、無駄遣いしなければ、五人家族が一年暮らせる金額だ。

ディルモアはけげんそうに問う。

「何を驚く？」

「いえ、最初に通された客室がラーベル家にある僕の部屋よりひどかつたので、もしかしてこの家は貧しいのではないかと思い……」

うつかり本音をこぼしてしまい、セオリスは両手で口をふさいだが、時すでに遅し。ディルモアはありえないという顔をして固まり、シエンは噴き出した。

「あはは、あははは。セオつてば、そんなことを思つていたの？ だから遠慮して、私を呼ばなかつたのだね。ようやく納得したよ」

シエンは口端を緩め、セオリスに説明する。

「グレン家は、小国と変わらない規模を誇る富豪だよ。セオは世間知らずだし素直な子だから、この家の財務を心配したんだね。あーあ、ディルモアつてば、客人に財布の中身を気遣わせるなんて、面目丸つぶれじゃないか」

シエンはからかつている口調で、遠慮なく言葉の矢を放つた。笑つているが、この件で怒つているのは間違いない。

「ディルモアの顔に朱が差す。恥のか怒りなのか分からないが、それが良くない感情なのは分かる。セオリスは急いで謝つた。

「申し訳ありません！」

「いや、構わぬ。あの連中の失態だ」

デイルモアは強面いわゆるだが、子どもを責める真似はしないようだ。分かりにくいだけで、優しさを感じられた。

（はあ、さすが、あの小説のヒーローだよ。人格者なんだろうな）

これが実父や叔父ならば、すでに怒鳴り散らしているような失言をしただらうという確信がある。デイルモアの寛大な面を見て、セオリスはファン心もあつて感動した。

二人の仲を取り持とうと決意を新たにして、セオリスはさつそく行動に移す。

「お兄様、閣下はこんなに優しくてご立派な方なのですから、あまり怒らないであげてください。それから、僕のことを心配してくれてありがとうございました」

「セオ、なんて良い子なんだろう。分かつた、君がそう言うなら許すよ」

シエンがそう宣言したことで、ようやくデイルモアの眉間のしわが消えた。表情が穏やかなものになる。

「シエン、すまなかつたな。今後は気をつける」

「ええ、期待しています」

デイルモアに、シエンは微笑を向けた。

このまま一人の世界に入る前に、セオリスはデイルモアに質問する。

「あの、ところで、先ほどの予算というのは、本以外を買つてもいいのですか？」

「ああ、好きに使うといい。欲しい物があるなら、出入りの商人を呼んで構わん」

デイルモアはそう答え、セオリスを見た。

「必要な物があるのか？」

「この地が思つたよりも寒いので、羽織物を買ひ足そうかと……」

「それくらいなら、衣装部屋にいくらでも余りがあるから、あとで届けさせよう」

デイルモアはクローゼットに目をとめて、側近に手振りで開かせた。セオリスの持ち物が少ないことに驚きを見せる。

「引っ越しの時も、荷物が少ない気はしていたが……。いいだろう。身の回りの品も、クローゼットいっぱいに補充させておく。それから」

次にデイルモアは暖炉を示す。

「必要なら、暖炉の火を入れてもいい」

余り物なら受け取つてもいいかと思つたが、暖炉を使つていいと言われたことには、セオリスも驚いた。

「そんな！ 夏に暖炉を使うだなんて贅沢ばいじやくはできません」

「我が家は富豪だからな。それくらいで破産したりはしないのだ」

デイルモアは軽口を叩いた。先ほどのセオリスの言葉を揶揄やゆしたようだ。セオリスは顔を赤らめて首をすくめる。

「もう言いませんので、どうか忘れてください」

「ははは。では、あとは医者に任せて、私は先に失礼する。まだ公務があるのでな」

どうやらディルモアは公務の合間に、セオリスとシエンの様子を見に来たらしい。ディルモアは去り際にシエンの左頬にキスをしてから、部屋を出て行つた。

「お兄様もどうぞお休みください。ずっと傍にいてくださったのでしょうか？ お疲れのようです」

シエンは昔からセオリスが寝こむと、忙しい合間を縫つて自ら看病をしてくれた。

「医者の診察を見届けてから戻るよ。少し待つていなさい。消化に優しいステップを用意させるから」

「魔力漏出病ですか」

シエンが食事を終えた頃、魔龍族の医師エドアが診察に来た。病名を聞いたエドアは首を傾げた。

初老に見えるが、魔龍族なので実年齢は見た目より上だらう。白髪交じりの黒い髪と灰色の目をしている。

「人間でも発症者が少ない病でしよう？ 魔力が漏れるのを防ぐ手立てはありませんし……できるだけ魔法を使わないようにして、安静にして過ごすしかありません。魔力補給薬の連用はおすすめできませんし……」

エドアは困り顔をした。シエンが残念そうな表情を浮かべる。

「人族の医師にも、同じことを言われました」

「魔力補給薬は緊急用のもので、未発達の魔力器官には負荷がかかりすぎますから。しかし、この

ようにしようつちゅうゲートが閉じるのは、あまり良いことではありませんね。ゲート不全病ふぜんびょうになる確率が上がります」

エドアは有能な医師なようで、魔龍族に存在しない病でも把握しているようだ。

「ゲート不全病ってなんですか？」

セオリスが質問すると、エドアは眉間にしわを寄せる。痛ましげな様子だ。

「あまり患者を驚かせたくないのですが……当事者なので知っているべきでしようね。あなたの今後に関わることです」

セオリスは嫌な予感がした。まるで不治の病を通告されるような前置きではないか。

「魔力が足りなくなると、生命力を使わないように、魔力器官と生命力のラインの間にあるゲートが閉じ、気絶することはご存知ですね？ それにより、体は魔力回復期に入ります。この仕組みは、人族も魔童族も変わりません」

「はい。それでたまに倒れて、寝こんでいます」

分かりきつたことを説明され、セオリスはもどかしい気持ちになった。不安が胸に押し寄せる。

（ゲート不全病なんて、あの小説にあつたかな？）

悪役セオリスが病弱で、使用人からいじめられたせいで性格がゆがんだとは知っているが。

「実は、健常な者の場合、ゲートは滅多なことでは閉じません。ゲートが閉じるほどの無茶をする状況なんて限られています」